

## たとえ胸の傷が痛んでも

松田妙子

八月三十一日に乳がんの手術を受けて、九月十日に退院しました。傷口からの出血が止まらず、予定より遅れての退院です。まだ、胸に血がどんどんたまるので、外来で通院して、注射器で血を抜いてもらっています。

十二日間の入院という「非日常」を経て「日常」に戻ったわけですが、以前と同じようにはいきません。体力が格段に落ちて、ちよつと何かしてもすぐに疲れます。それに、病院食は油っこくて入院中は殆ど食事が摂れなかったので、少し食べてもすぐ胃が苦しくなります。腰も痛めました。その上、切開してみても、術前の検査より悪性のがんが見つかったので、これで抗がん剤治療やホルモン療法を受けることになれば、また副作用にも苦しめられるのだろうと思いました。ただできえ、右の乳房を完全に失った私。私はもう以前の私じゃない。でも、新しい自分とのつき合い方がわからない。そんな感じです。

そして、いよいよホルモン療法が始まりました。これは通常、五年は続けなくてははいけないと言われています。そしてこまめに定期検診に通い、十年間、再発や移転が見られなければ、一応治ったと見なすとのこと。あくまでも「一応」です。がんとの闘いは長丁場です。私は四十年以上摂食障害をやってきて、今では摂食障害でない私なんて考えられないくらいですが、これからはがん患者としての新しい人生も始まったのですね。

右の乳房を完全に切り取ったので、私の右胸には大きな手術の傷跡が残り、今も時々痛みます。それで、「アンパンマンのマーチ」を思い出しました。こんな歌詞です。「そうだ、うれしいんだ、生きる喜び、たとえ、胸の傷が痛んでも」

文字通り、胸の

傷が痛む私ですが、「生きる喜び」を素直に感じて感謝して日々を送っているか？と言えば、全然そうではありません。手術の翌朝こそ、地獄のような一昼夜が明けて、一種すがすがしい気分になりましたが、

退院してくると、また以前の生活の垢にまみれてしまいました。清潔で安全な病院の中で保護されていた時とは違い、一人暮らしの部屋に戻ってみれば、ゴキブリも出るし台風も来ます。そんな中で思うように回復しない体を持って余し、苛立ち不安にさいなまれる日々。

でも私には帰るべき原点ができたのかも。手術後二十四時間は、水さえ飲めずにベッドの上から動いてもならず。眠剤も飲んではいけないので眠ることもできず、ずっと同じ姿勢を強いられるので腰は痛く、熱は出るし、のどはカラカラ。そんな苦しい一夜が明けて朝食が出された時、小さなパック入りの牛乳が何とおいしかったことか！自分の足で歩いてトイレに行くことを許されるのが、何と待ち遠しかったことか！

そして、十二日間の入院に、二十人以上もの友人・知人が面会に来てくれたこと。彼女らがたずさえてきた、多くの人々からのお見舞いやカンパ。入院中に会った、名も知らぬ患者さんたちやナースたちのこと。それらを私は忘れはしないでしよう。片方の乳房を失っても、私の得たものは多いはず。がん細胞が、目に見えるほど大きなしこりを作るのに十年、二十年かかるとしたら、私の中に播かれた種も、そのくらいの歳月を経て花開くのもかもしれません。それまで生きていければ、の話ですけれど。私の中に芽生えたがんに追いつかれないように、

ちに、花を咲かせることができればいいなあ、くらいに思っています。きましよう。

心身ともにまだ本調子ではないので、まだ、まとまった長い文章を書ける所までは至っておりません。とりあえずは、手術を終えて退院したことのご報告まで。

2012、10、5、3PM\*

